



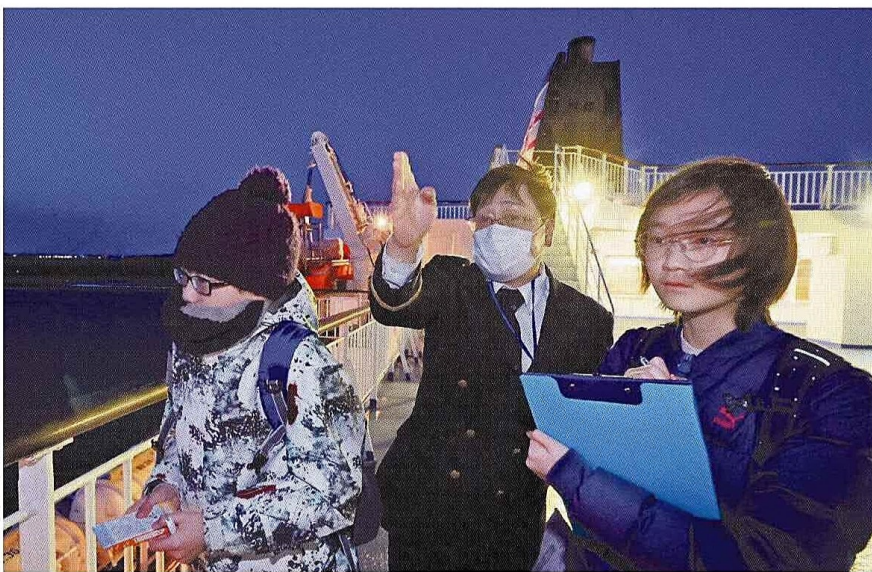
とまこ まいし
苦小牧市

フェリーに乗ったことはありますか？ 船内にはホテルのような宿泊施設があり、海をながめながら車といっしょに目的地まで移動できるのが魅力です。「北海道の海の玄関口」と呼ばれる苦小牧港は、本州まで行き来するフェリーがたくさん発着します。こども記者まなつくの2人が「新日本海フェリー」という会社のフェリーを見学しました。（小林彩乃）

フェリーまるでホテルのよう

「まなつく」は、まなぶんの「まな」に「行く・聞く・書く」に由来する愛称です

こども記者 まなつく 見ぶん 録



2人は葛西龍之介さん（苦小牧市・樽前小6年）と原万琴さん（新ひだか町・高静小5年）。苦小牧港は東と西に分かれていて、今回は東港に行きました。「おつきいね。早く乗りたい」。午後5時前、夕日を背に港に入ってきたフェリー「ゆかり」を見た2人は歓声をあげました。全長199・9メートル、1万8229トで5階建て。一度に846人とトラック146台、乗用車58台

安全に快適に 物流支える役割も

きるのもフェリーの特徴です。

2人は、新日本海フェリーのフロントマネジャー 高木博史さん（51）の案内で客室へ。窓から海が見える和室やテラスがついた洋室など計142室あります。一番広いスイートルームには、専用デラスやお風呂もついていました。

「おいしい食事食べられますよ」と高木さん。葛西さんは「つかとまてみたい」と興奮した様子でした。船内には広い海を見ながら入れる大浴場や映画館もあり、飛行機や列車とはちがう旅を楽しめます。

車やトラックを積み込む甲板や、屋外の開放的なデッキも見学。



初めて間近にした「ゆかり」に見とれるまなつくたち（小林彩乃さん）

高木さんは「旅行者だけでなく、食品や工場の製品なども積み込んで、トラックやトレーラーで積みおろししています」と、物流を支えるフェリーの役割を語りました。

高木さんは船長の制服を用意してくれました。夏用の白い服は葛西さん、冬用の黒い服は原さんが着ます。「さあ、船長に会いに行きましょう」。特別に許可をもらい、船長らが働く場所「ブリッジ」へ。大内司船長（48）の

出むかえを受けました。

2人はレーダーや電子海図など見慣れない機器に興味しんしん。船を操作する「かじ」にもさわり、原さんは「思ったよりも小さい。これで大きな船を動かせるなんて、すごい」と声をはずませていました。

大内船長は「障害物があつて船を止めようとしても、止まるまで5分かかります。障害物がないか、双眼鏡などで常に確認しています」と教えてくれました。イルカが泳ぐ姿も、よく見かけると言います。

原さんは「日ごろ気をつけていることは何ですか」と質問。大内

西港は太平洋 東港は日本海を運航

苦小牧西港と東港は20分ほどはなれていて、車で約30分かかります。西港は仙台や大洗（茨城県）など太平洋側の港と結ぶフェリーが発着しています。運航している会社は商船三井さんふらわあと太平洋フェリー、川崎近海汽船の3社です。一方、東港を発着するフェリーは秋田や新潟など日本海側の港を通ります。新日本海フェリーの1社が運航しています。

船長は「お客さまを安全に運ぶことと時間を守ること。特に冬は波が高く、風が強いので時間通りに着けない場合もありますが、その時は船内アナウンスでお知らせします」と答えました。取材を終えた原さんは「制服を着たら船長さんになったような気分がわくわくした。お客さんを安全に快適に運ぶため障害物がないか確認したり、アナウンスをしたり、いろいろ工夫していると分かった。船の仕事にも興味があった」と満足そう。葛西さんは「いつかフェリーで旅をしたい。もちろんスイートルームにとまりたい」と笑顔をみせました。

まなぶんデジタルに動画